

「徴税人レビを弟子にする」

2015年05月23日

ルカによる福音書 5章27節～32節。その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大量に、一緒に席に着いていた。ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

ローマ帝国の手先になって税金を取り立てる徴税人は罪人と見なされ、ユダヤの共同体から排斥されていた。徴税人レビは深い孤独の中で、魂を失った人のように茫然自失の状態に陥っていた。主イエスはレビを見て「わたしに従いなさい」と言われた。この一言によって、レビは自分に目を留め、必要な人間であると認め、従えと呼びかける言葉を聞いた。心の空洞が喜びで満たされ、全てを捨てて立ち上がり、主イエスに従った。苦渋の中で、一言の言葉と出会って、前がくっきりと開かれることがある。レビは主イエスに招かれ、それを体験した。彼は喜び、主イエスと弟子たち、また、仲間の徴税人、罪人（重病者）を招き、盛大な宴会を催した。経験したことのない嬉しさと楽しさが溢れる宴席となった。これを見た律法学者たちは弟子たちに「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか」と言った。主イエスに直接言わず、弟子たちに非難の言葉を浴びせている。彼らは「浄、不浄」を律法で識別し、自らは清い者と自認していた。清さを誇る人は汚れた人々をこしらえて、彼らを差別し排除することによって、清さを保てると自惚れていたのである。

主イエスは律法学者たちの非難に対し、「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と言われた。神は、生きる場を失っている人々を真っ先に受け入れていると語り、その現実を示された。

前任の教会には、盲人の方、身体的、精神的障がいを持つ方、生活保護を受けている方が多数おられた。ある方がクリスマス礼拝に初めて見えた。帰る時、私に「教会はめくらとびっこ（本人が言われた言葉通り）ばかりですね」と言った。その方はリュウマチで指が大きく曲がっていた。また、夫が盲人で、本人はカリエスで背中が曲がった病弱な体であったが、命がけで子どもを生み、育てていた女性がいた。彼女は礼拝堂の椅子に座ると、声は出さず滂沱の涙を流された。説教になると昏々と眠った。礼拝が終わると、清々しい顔で帰って行った。主イエスのおられる教会は、今日の御言葉の通り、生きることに苦悩している人々を招くところであると知らされ、多くのことを教えられた。

日本の教会はインテリや恵まれている人が多いと言われている。教会に初めて見えた人が「ここは、私の来る所ではない」と感じることはないか。教会は文化的な社交場ではなく、互いの弱さと痛みを分かち、支え合う群れである。「罪人を招く」という御言葉に伝えていくところに主イエスが生きて働かれる教会が建つ。レビを弟子の一人に加えたことは、福音の本質を表している出来事である。